

『命を抱く』 井上隆晶牧師

詩編 92 篇 10～16 節、ルカによる福音書 2 章 22～38 節

①【救いを待ち望むとは】

イエス様は生まれて 40 日後に、初めて神殿に連れて行かれました。出産後のマリアに清めの儀式をするためと、幼子イエス様を神様にお献げするためです。その時、エルサレムにシメオンという人がいました。シメオンは正しい人で信仰があつく、イスラエルが慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、メシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていました。(25～26 節)

シメオンはイスラエルの救いを待ち望んでいました。「私の魂は主を待ち望みます。」(詩編 130 : 6) とあるように「神を待ち望むこと」は聖書全体を通してのテーマです。「待ち望む人たち」これがイスラエルの特徴です。しかしイスラエルの全ての民が神を待ち望んでいたわけではありませんでした。多くの人は「待ち望む」ことをやめてしまいました。正確に言うならば、救いを待ち望んでいたのですが、神にではなくこの世に、この世の力のある者に求めるようになったということだと思います。しかしシメオンたちは神を待ち望む少数者、イスラエルの残りの民でした。それは預言されていたことでした。「私は柔和にしてへりくだる民を、あなたのうちに残す。彼らは主の名を避け所とする。イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わない。」(ゼファニア 3 : 12～13 口語)

私はここを読むたびにシメオンにとっての救いとはいったい何だったのだろうか、と思います。皆さんにとって救いとは何ですか？これはとても重要な問いかけだと思います。クリスチャンでも救いの考え方が分かれるからです。

●『唯一神か、三一神か (ユダヤ教とキリスト教の対話)』という本があります。ユダヤ人教師ラピデとキリスト教神学者モルトマンが対話をしている本であり、ユダヤ人がイエス・キリストをどのように考えているのかということが分かります。ラピデは、キリスト・イエスは大勢いるメシアの一人であって、外国人に神を教えるために来た《外国人のためのメシア》だといいます。自分たちはもう神を知っているので彼を必要とはしないというのです。ラピデはメシアは人であって、「神のひとり子」というのが理解できないといいます。またキリストが復活したことを救いの始まりとして信じることは出来ないといいます。なぜなら「天国のいかなる兆候も発見することが出来ないからです。」といいます。彼はこう言います。「あなたがたの中心には王があり、私たちの中心には御国があります。あなたがたの中心には救い主がありますが、私たちの中心には救いそのものがあります。」「私たちにとって重要なのは救いそのものであって、それを遂行するのは誰かという問いは…二義的なことなのです。」

どうでしょう。ユダヤ人の救いの方が分かります。ユダヤ人の救いとは、地上

に目に見える形で天国（ユダヤ王国の再建）が出来上がる事であって、それが救いなのです。それをしてくれる人物がメシアなのです。キリスト教の救いとは全く違います。私たちにとって天国は目に見える形ではなく、聖霊によって心の中に出来上がるものであり、私たちは目に見えるものを信じているのではなく、イエス・キリストと、その業を信じているのです。だから死ぬ時、まだ地上に天国が現れていなくても、すでに私の死はキリストが滅ぼし、永遠の命が取っておかれることを救いだと信じています。私たちはラピデがいうようにイエス・キリストという「神のひとり子、王、救い主」が重要になって来るのです。皆さんはどうですか？ユダヤ教徒になっている人はいませんか？私はシメオンが求めていた救いというのは、地上天国ではないと思います。彼ははっきりと言いました。「私はこの目であなたの救いを見たからです。」キリストが救いなのです。

②【聖霊は私たちがキリストに導いてくれる】

シメオンやアンナはイエス様に会ったことがありません。神殿の中には大勢の人がいたのに、どうしてイエス様のことが救い主だと分かったのでしょうか。それは聖霊が教えてくれたからです。25～27 節まで「聖霊が彼にとどまり」「聖霊から受け」「霊に導かれて」と、「聖霊」という言葉が三回も出てきます。鉄と磁石は同じ性質なので、お互いに引き合います。それと同じように、聖霊もイエス様も分かれざる一体の神なので、互いに引き合い、互いを教え合い、自分と同質のものの上にとどまるのです。人間は神を知ることはできません。神だけが神を知っています。私たちは同じものによって同じものを知るのです。だから聖霊を持つ人は、御子イエス様が分かるようになります。聖霊は一度受けたら、もう二度と受けなくて良い、というものではありません。聖霊は私たちが求めなければ去ってしまいます。10 人の乙女の譬えを聞いたことがあるでしょう。10 人とも灯は持っていました、その内の 5 人だけが油を用意していました。油が無ければ灯は消えます。油の用意の出来ていた賢い 5 人の乙女だけが宮殿の中に入れられたのです。灯は信仰であり、油は聖霊です。信仰はただで貰えますが、聖霊は私たちが準備しなければならないのです。私は聖霊を持つ者だけがキリストを信じることができるのだと思います。聖霊がいなければ人は、キリストではないこの世の物に救いを求めるようになるのではないのでしょうか。信仰を維持するためには、聖霊を求め、祈り、神の言葉を毎日読むという信仰生活をしなければなりません。女預言者アンナは神殿から離れず、祈り、夜昼、神に仕えていました。だからこそキリストの所に導かれたのです。

③【平安を得る秘訣～キリストを抱く～】

彼が聖霊に導かれて神殿の境内に入ってゆくと、そこへ両親がイエス様を連れてきました。シメオンはすぐに幼子をメシアだと分かり、イエス様を腕に抱き、神をたたえて言いました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです。これは万民

のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(ルカ 2:29~32) これはヌンク・ディミティスといわれ、晩課で歌われるようになりました。晩課とは寝る前の祈りです。彼は「私はもうこれで安心してこの世を去る(死ねる)ことができる」といったのです。

●クリスチャンである文学者犬飼道子さんが、アメリカに留学した時のことです。彼女は重度の結核になり、カリフォルニア州南部の結核サナトリウムに入れられました。ある日、一人のシスターが「なかなか良いことが書いてあるよ」といって小さな冊子を持ってきました。しかしいい本を数十冊も枕元に積み重ねていたので、その小冊子を手取る気持ちはなかったのですが、シスターの好意を無駄にしないためにページをめくると、たちまちその文章のとりこになってしまいました。それは J という人が書いたものでした。早速彼に手紙を書くと、タイプで打った返事が送られてきました。手紙の最後に J の署名がありましたが、それがひどく震えた文字でした。それから J と文通が始まるのですが、クリスマスに一人の司祭が J に頼まれて訪ねて来ます。彼は「J の事を知っていますか？」と問い、J は小児麻痺の重度の身体障害者で、口を除いて、手足も首も動かさせません。しばしば襲う心臓発作の激痛に耐えながら、施設で二十数年過ごしている身寄りもお金も全くない青年であることを教えてくれました。「彼は与えられた心と力を使い、周囲の人に喜びをまく人です。」と司祭はいいました。施設に働く人たちがお金を持ち寄り、彼の言葉を冊子にして、無料で刑務所や障害者施設や、病院に送るのです。彼は口にペンを加え署名するので、字が震えていたのです。犬飼さんはこう書いています。「彼の友情の中にキリストを感じ取りました。…音信が途切れて間もなく、私は…アイコンの聖画のカードを受け取りました。…画は勝利のキリストの肖像で、裏面には「私の恵みはあなたに十分である」と書かれていました。私は涙をこぼしましたが、不思議と悲しみませんでした。ただ感謝しました。賛美しました。人がキリストの愛に生きると、ここまで美しく強く生きられるのかと感動しました。そして自分が病気であることを感謝しました。もし倒れなかったら J に巡りうことが出来なかったでしょう。」

J は重度の障害者でしたが、心の中には溢れるような喜びと自由がありました。キリストの愛が彼を豊かにしたのです。これこそ天国です。地上に救いを求めるユダヤ人にはないものです。老人シメオンは、幼子イエス様をその手に抱きました。今、死は永遠の命を抱き、死は再び命に接ぎ木されて生き返ったのです。キリストを信じる人は、たとえ歳をとっても、このように喜びにあふれる事ができるのです。世は移り変わりますが、永遠のものにつながって生きることには勝る喜びと平安はありません。今年も、キリストをしっかりと抱いて生きてゆきましょう。